

Pride and Prejudice にみる人生

—Mrs. Bennet をめぐって

太 田 藤 一 郎

I

England 南部の白堊の丘にある Steventon という村に、8人兄妹のうち7番目として生れた Jane Austen (1775-1817) は、父の牧師職の関係から、よぎなく各地を転居しなければならなかった。しかし、そのことが彼女の作品の背景的要素として役立ち、田舎の中流家庭、村人、牧師、田舎紳士などの交際が、彼女の作品の題材となったのである。独身の彼女は、家庭にあって、まるで日常の家事とたがうところがないような態度で、創作活動を続けたと言われている。このような生活環境と創作態度から、Richard Church が指摘するところの¹、彼女の作品の基礎となっている平静さ (serenity) がうまれたのであろう。*Pride and Prejudice* は21歳の時にかかれ、*Sense and Sensibility* は22歳の時の作品である。この当時、作家活動は立派な職業とは思われていなかったこともあってか、彼女は作家としての力みを持たなかった。しかし芸術家としての彼女の素質はすでに熟していたと思われる。すなわち、彼女は社会の動静の埒外にはなれることを知り、時代の姿をうつす彼女の心の鏡は、冷静で、明晰であって、激情や混乱によって曇らされることはなかった。彼女の心の鏡にうつった社会風景は、金銭、社会的地位を追求することにうつつを抜かしている人達のたたかひの、儂くもおもしろい風物であった。

イギリスでは、海外植民地の拡大と貿易の発展にともなって、これまで政治的、経済的権力を握っていた貴族、地主階級から、商人階級へと富の

移動が起った。その結果、富を背景とした貪欲な新興資本家階級は、その子女の婚姻という手段によって、無力化しつつあった貴族、地主達と手を結んで、肩書きを僭称し、家名に箔をつけることを熱望した。こうして、土地の資本と商業の資本との結合が発生した。植民地で大金をもうけたイギリス人達や、海軍提督、閣下、ニグロの御者などが、錦を飾ってイギリスに帰ってきた。その結果、イギリス社会に複雑さ、混乱、矛盾が起った。如何に生きていこうとするかという人間の行動、価値にたいする多くの問題の根源が、社会のこの複雑さ、混乱、矛盾の中にあることを、われわれは想到することが出来る²。土地、財産をめぐる多様な社会風景は、小説の領域にたいして、充分な事件と問題を提供した。社会は不安定であり、複雑な、投機的動きは、人々をして、商売や軍人恩給で得た金を、家屋、土地、社会的地位の獲得にかえさせたし、結婚によって土地、収入を増加させた。

結婚とはすさまじい血まみれのスポーツであって、女性たちはその狩人であり、社会的地位と財産のある男性たちは、その獲物である。しかし、Jane Austen の目には、いかに富莫大であろうとも、いかに社会的地位高かろうとも、それは人生の幸福にたいして、いささかも必要なものでもなく、何のたすけともなるものでないと見えた³。少しでも条件の良い縁組をかちとるために、秘策のねられる猟場に、感傷、激情、情におぼれ流される人々と、分別、理性、知にさおさして生きていく人々——この二種類の人々の流転の実相を、彼女は看取したのである。

II

日常生活を綿密に検討、理解することによって発見された真実を、芸術的に表現することが、作家の仕事であるということを知っていた Jane Austen は、彼女の取材範囲を、その身辺の家庭生活の中に求めた。そして彼女の学びえたものは、愚行とナンセンスを演じている当時の人達の生

活風習の実態であった。すでに一般読者が愛読していた作品の中にみられる虚構性に、彼女は同意できなくて、無知な人達の愚行、ナンセンスを軽快に皮肉ろうとした。そのために、彼女の作品が‘the novels of domestic satires’ とよばれるに至ったのであって、そのゆえんの由来もうなづかれるのである。 *First Impressions* (1796) として書きはじめられた作品が、のちになって *Pride and Prejudice* (1814) と改題された。 Samuel Richardson が、 作品の中でイギリスの青年紳士 Sir Charles Grandison とイタリーの貴族の娘 Clementina とを、対立した宗教のために別れさせた。これは上流階級の高慢と、男の社会的身分にたいする彼女の偏見との闘いを現わしたものである⁴。また美しい Clarissa の強い拒否にあったために、彼女の貞操を奪ってやろうと、更にはげしく自尊心にもえ立った Lovelace。彼の攻撃に、彼女は徹底的に反抗したけれども、最後には麻酔薬をのまされて肉体をうばわれ、自殺した中流階級の娘 Clarissa。彼女と彼との闘いは、自尊心と自尊心との闘いを示すものである。しかしながら、貞操を守りぬこうとする彼女の姿勢は、一種のむなしい自尊心であり、このむなしい自尊心を裏返しにしたものが偏見である⁵。この Samuel Richardson の作品を愛読したと言われる Jane Austen は、上流階級の名誉を信条とした Darcy の自尊心と、そういう富や社会的地位に支えられて成立している名誉なるものの正体を見破り、軽蔑している聡明な Elizabeth の偏見との闘いを描いている。Elizabeth を分析してみると、彼女自身のもつ人間的な価値を堅持し、自負しようとする自尊心と、でしゃばり根性が混在していることがわかる。 *Pride and Prejudice* のテーマは、恋愛、結婚である。この問題が、人間を、特に女性を如何に利己主義にするかということが、作者によって究明されている。人々をして利己主義にさせる一因は、そこに社会的地位、金銭にたいする所有意識が介在するからなのである。

Courtship and marriage were always Jane Austen's concerns,

but in her major works she was able to give these commonplace subjects such a range of implication that they figure forth basic conflicts between social-economic necessities and the need for spiritual freedom.⁶

この引用文には、愛の存在価値を無視し、娘の結婚によって、社会的地位、金銭と手を結びたいという、世の親の名誉欲にかられ、物質の奴隷となった、貪欲な、自己中心的な倫理性が、強く存在している情勢を、Jane Austen がうけとめていることが指摘されている。こうした社会の実相を察知して、18世紀のある小説家たちは、金銭と愛との闘いをとりあげて、作品の核心としたのである。Austen も、金銭、社会的地位にあこがれる人間の愚行を軽蔑した。そして同情、いたわり、人間性の尊厳さの中に生きようとする人々の世界を、彼女は支持することによって、愛情、人間の幸福、人間の価値を高揚しようと努力した作家である。

感傷性よりも理知、分別を重んじた Jane Austen は、涙、ヒステリー、狂気、失神といった肉体的な反応現象、すなわち感情を表現する感傷小説の基礎となっているものが、実は自己中心の倫理であることを発見した。そして彼女は、この倫理性とその表われにたいして批判の目を向けた。物質的財産へのあこがれが、感傷小説の一つの特性となっていることや、自己の利益という考えから、間違った感傷が生れてくるということや、一個人の道徳観の崩壊が、利己主義を生むものであるということや、彼女は考えるに及んだ。この過程から、物質的富にたいする彼女の軽蔑が生れてきたのである⁷。彼女のこの軽蔑が、娘達を結婚市場に売出すための有利な商品に仕立てるために、教養を身につけさせようと努力した母親たちの涙ぐましい願望を、愚行であり、ナンセンスであると、Austen をしてきめつけさせた。教養とは何か。音楽、歌唱、絵画、舞踊、英語などについての知識を身につけること、歩きかた、声の調子にたいして何かを持つこと⁸、これがいわゆる教養と考えられたのであった。それはものの本質を

究明する知性を身につけることではなかった。こういう所作を皮相に身につけて、それで教養があるとして、心おごった娘が Caroline Bingley である。かりに、Caroline の考える所作を教養としてとり入れるとしても、それ以外に、広く読書をすることによって、精神を開発するための更に重要な何物かを身につけること、これが Darcy の考えであった。Elizabeth Bennet は、聡明であるが故に、Caroline の考えすましている教養を馬鹿げたことと判断した。愚かしいことを、愚かしいともわからないで、まことにすばらしい喜劇を演じてくれるのが、Mrs. Bennet であり、Caroline である。この女性たちとはちがって、それを愚かしいこととみて、冷静にその愚かさを解体しようとしたのが、皮肉にも Mrs. Bennet の娘であるこの Elizabeth であるとは、まさに人生は皮肉な絵図である。

Emma の作中人物、Knightley は大邸宅の所有者、Emma は3万ポンドを相続出来るはず、Mr. Weston は由緒ある家柄の者で、大家の娘と結婚、Harriet は金持の商人の娘、Elton には若干の財産があった。Sense and Sensibility の Dashwood 家は、土地を所有している落ち着いた家庭で、婚姻によって収入をふやし、娘たちの財産を拡大していった。Pride and Prejudice の登場人物、Darcy は代々続いた大地主、その年収は1万ポンド、Bingley は10万ポンドの遺産をゆずりうけ、その年収は4、5千ポンドとの噂で、地所を買いたいとさがしている。Sir William Lucas は、商人から身をおこし、爵位を与えられている。Mr. Bennet は年収2千ポンド、その地所の相続は限定されている。このように社会的地位、財産といった欲望の花をさかせる雑草に、この作者の作中の人物たちはとりまかれている。言うまでもなく、5人の娘達の母親 Mrs. Bennet の周囲の人々も、何かの意味で財産にかかわりを持った人達である。頭の働きの弱い、知識の乏しいこの母親が、期せずして彼女の身边的人達の影響をうけ、おし流されていったのは、むしろ当然の成り行きである。その点、むしろ一抹の同情に値いする女性である。こういう階級の代表者として Jane

Austen は Mrs. Bennet を創造したのであるが、そこにわれわれは、作者の現実をみとおすリアルな眼と態度を発見する。

‘A single man of large fortune; four or five thousand a-year.
What a fine thing for our girls!’⁹

この母親の一生の仕事は、娘を結婚させることであり、近所の家庭を訪問してニュースを交換し、おしゃべりをするのをたのしみとした。彼女は結婚して23年、なお夫の性格を理解することが出来ない。Mrs. Bennet は、村にやってきた金持の青年 Bingley が、わが娘達の一人と結婚してくれるかもしれないと、ひとりできめこみ、自分たち女性が訪問できるための口火をつけてくれるようにと、Mr. Bennet を攻めたてる。すると、「娘たちよりも、お前を一番気に入るかもしれないぞ」という夫の毒舌にたいして、Mrs. Bennet は、「私はたしかに美しさにかけては、負けはとりませんわ、でも、5人の娘を育ててきた今となっては、自分の美しさを考えることは、止めなければならないのよ」と愚かしくも神経をたかぶらせる。夫の冷静さと、妻のいらだちとの衝突は、皮肉な情景となる。しかし、Mr. Bennet も若かりし頃、冷静な判断力を失って、うかつにも、ある娘の美しさに征服されて結婚した。その女性が、今なお美しさを自負している Mrs. Bennet であるところに、さらにおかしな皮肉の風紋がひろがっているのが、認められはしないだろうか。

Jane Austen の意図が、人々の愚行、ナンセンスを描こうとするところにあるとすれば、*Pride and Prejudice* の視点が、信じ易い、正直な、親切な娘 Miss Jane や、また無能、単純な人達、Mrs. Bennet, Lydia, Mr. Collins, Miss Bingley などに向けられていると、一応解釈される。とりわけ、Mrs. Bennet がその代表選手と目されてもよい。Bingley 一行の歓迎舞踏会で、自尊心が高いと Darcy を誤解した最たる者は、この Mrs. Bennet である。Mr. Bingley が Miss Jane と二回も踊ったことにたいして、「Bingley 青年が、わしに少しでもあわれみを持ってくれたなら、

その半分も踊りはしなかったであろうに！」と Mr. Bennet が早くも事態のなりゆきに、批判的な憂慮を感じているのに反して、妻の Mrs. Bennet は、期待に胸をふくらまし、Bingley や、彼の姉妹の美貌、魅力、その上品な服装、外見的な容姿に心を捉えられる。しかし彼女は、この姉妹が利己主義的で、差別意識にとらわれ、虚栄心の強い女性であるという、彼女たちの本質を見抜くだけの知性のないことを露呈するのである。若い時の美しさによって、夫を獲得した経験的事実が、娘の容色の失せない間に縁談をすすめようと、Mrs. Bennet を血眼にさせるのである。

It is comedy in the sense that it approaches the question of the relation between the sexes from the point of view of a worried mother trying to marry off her daughters.¹⁰

このように、David Daiches によって指摘されているように、娘の縁談を成立させることだけが、絶対の生きがいと考える愚かな母親のわれを忘れた生きざまが、この作品を喜劇的にしている。母親の愚かさとは反対に、Elizabeth は、他の人々の愚行、ナンセンスのわからないわが姉 Jane の愚かさを知っていたし、また自尊心が高くうぬぼれやで、上流階級を鼻にかける Bingley 姉妹の、どうしようもない愚かな性質も、Elizabeth は見破っている。上流階級の女性たちは一般に読書をするのが好きでなかったようであるが、この Bingley 姉妹も、カルタ遊びにほうけ、内容のないおしゃべりに夢中になるけれども、読書には縁が遠かったようである。にもかかわらず、Darcy が読書をたのしんでいる Elizabeth に関心を抱きはじめてのを知るや、早速 Miss Bingley は、書物を持ち出し、書物を読む利口な女性であるというふりをする。実はこの姉妹たちの父親は、成上りの商人俗物なのであった。こういう状況において、自尊心と偏見との闘いが Darcy と Elizabeth との間にはじまるが、知的な彼女と、彼女の黒眼に惹かれる Darcy との、心のたたかいは、すなわち、お互への意識であり、それはまた愛の芽生えでもあった。娘の縁組にヒステリ

ックになっている妻を、また町の駐屯兵に夢中になっている末娘 Kitty, Lydia を、Mr. Bennet は馬鹿だと思っている。彼の妻の愚かさは、彼女自身の愚かさに気付いていないことである。Vineta Colby は次のように述べている。

The mother, nevertheless, is the figure of chief attention in these novels. . . . matrons are of stronger fiber and are more interesting. . . . They had a job to do — marry off their children — . . . History as well as fiction records the powerful influence of the matron-dowager in English society. The fates of landed families hung on the possession and prosperity of their land. Marriage was therefore an investment of the highest importance.¹¹

世の母親は、小説の中では注目の的となるものであり、また、強い性格をもち、興味ある存在である、と Colby は考えるとともに、結婚は最も重要な投機であると言っている。この Mrs. Bennet にとっても、娘たちの縁談をさがさなければならないことは、母の義務であり、宿題である。だから、縁談にたいする彼女の運動と、損得の計算が生じるのである。すなわち、Jane にたいして Bingley より招待状が送られてきたとき、この母は有頂天によるこび、娘を馬車でなく、乗馬で行かせる。そうさせたのは、Mrs. Bennet の思惑なのである。この母の頭の回転は、こういう事にたいしては到底他の人に見ないほど頗る素早い。すなわち、この母は、天気はやがて雨になりそうであることを見抜いた。乗馬で行けば、途中で雨に濡れて、娘は風邪をひくにちがいない。Bingley の邸で、病気の治るまで娘の滞在日数が長びけば、それだけ娘の縁談に有利な情勢展開となる訳である。この母の予想が的中し、Jane は発熱し、病床にふしているという知らせが届けられる。してやったり、まさに母のよろこび、何んとも言いようがないのである。それ故、泥濘の中を、スカートのすそが汚れる

のもいとわないうで、姉の見舞に馳せ参じようとする Elizabeth を、もつてのほかと、この母は阻止するのである。このときの母娘の問答が、はなはだ面白い。

‘She will be taken good care of. As long as she stays there, it is all very well. . . .’

Elizabeth, feeling really anxious, was determined to go to her, . . . She declared her resolution.

‘How can you be so silly,’ cried her mother, ‘as to think of such a thing, in all this dirt! You will not be fit to be seen when you get there.’

‘I shall be very fit to see Jane — which is all I want.’¹²

美、醜の想いがちがうが、この母、娘いづれが愚かなのであろうか。そこに作者の皮肉な眼がひかっている。Bingley の邸での看護生活は、Elizabeth にとって大いに不満であつた。ところが、Jane と Elizabeth が家に帰つてくると、Mrs. Bennet はすこぶる不満、娘たちを歓迎しない。まさに哀しい母心である。しかし、幸いなことにこの母の不満を解消したのは、愚者中の愚者、Collins と名乗る青年牧師の来訪である。

権威の崇拜者、有難がりや、お世辞乱発屋の俗物牧師 Collins の来訪目的は、Bennet 家の娘のうちの誰かと縁組することである。人情を解しない、無神経な Collins、彼にとって、不幸と言おうか、誰にもまして利口な Elizabeth に、次のように結婚にたいする所信をひれきするのである。

‘My reasons for marrying are, first, that I think it a right thing for every clergyman in easy circumstances (like myself) to set the example of matrimony in his parish. Secondly, that I am convinced it will add very greatly to my happiness; and thirdly — . . . that it is the particular advice and recommendation of the very noble lady whom I have the honour of calling

patroness. . . . it remains to be told why my views were directed to Longbourn instead of my own neighbourhood, where I assure you there are many amiable young women. But the fact is, that being, as I am, to inherit this estate after the death of your honoured father, (who, however, may live many years longer,) I could not satisfy myself without resolving to chuse a wife from among his daughters, that the loss to them might be as little as possible, . . . This has been my motive, . . . ¹³

彼のあげる結婚の理由を分析してみると、経済的安定、社会的地位がすでにあるということである。これを知って、Mrs. Bennet が何条よろこばないはずはない。彼女は、たちまち Collins を下にもおかないでいちょうさで、彼の申込に賛意を表するのであるが、Collins にたいして口を利かない Mr. Bennet と、彼に疑問を感じている Elizabeth とは、一刻も早く Collins から解放されたいものとのぞむ。この父、この娘の価値判断が、如何に Mrs. Bennet のそれと対立し、異質なものであるかがわかる。

Elizabeth's caution and extreme fastidiousness on the question of marriage originates from her acute sense of the inequalities, perpetually before her eyes, of her parents' marriage. She resembles her father in her lively wit and her appreciation of the ridiculous: . . . ¹⁴

Elizabeth が Collins のプロポーズを拒否するなら、今日限り娘とは他人となって、娘の顔も見ないだろうと母は言い、逆に Collins の申込をうけ入れるようなことになれば、娘の顔をみたくないと父は言う。ためらうことなく、Elizabeth に拒否された Collins は、ためらうことなく、彼女の親友 Charlotte をえらぶ。利口な Charlotte を同意させたのは、牧師としての経済的安定であった。Elizabeth の聡明さは、彼女をして愛情の方につかせ、Charlotte の利口さは、彼女を物質的財産の方にはしらせた。

二人の娘をして別々の途をとらせたのは、いずれも彼女たちの一種の分別である。利口だと思っていた Charlotte が、我が妻と同じくらい馬鹿なのを発見して、Mr. Bennet はすこぶる愉快になる。しかし、末娘 Lydia が、不誠実で、名誉心のない、最大の悪人とみられている Wickham と駈落ちするという不名誉な事件が突発すると、Mr. Bennet はもはや愉快をたのしんではいられない。ことここに至っては、Mrs. Bennet とその娘たちの教養の低さを、かねてから指摘していた Darcy の見解の正しかったことを、Elizabeth も認めなければならなかった。彼女にたいする Darcy の愛の芽生えも、これで枯渇してしまうであろう、と Elizabeth は気落ちする。彼女の傷心に追い討ちをかけるかのように、Collins からは、駈落事件は親戚の不名誉であると非難し、Elizabeth と結婚しなかったことは幸いであったという手紙がとどく。こういう不人情な牧師 Collins を、Mrs. Bennet は婿として Elizabeth に強要したのであった。娘の結婚相手として考えるときは、Collins は得になる人物ではあるが、結婚相手でなく、ただ夫の死後に財産をさらっていく人物に変るときには、腹の立つ人物となる。こういう理由で、彼にたいする Mrs. Bennet の感情は、尊敬と立腹との両極にゆれうごいたということになる。

Two subjects dominate her [Mrs. Bennet's] life and conversation: the injustice of the entail by which Mr. Bennet's estate will descend to his closest male relative than to his immediate family, and the problem of getting her daughters married.¹⁵

Elizabeth を Darcy の結婚相手と考えなければならない羽目におちいると、Lady Catherine は Elizabeth を容認することが出来ず、腹立たしくなり、猛烈に反対せざるを得ない。したがって、Elizabeth を愛しはじめた Darcy を、彼女から引離そうとした Lady Catherine と、Collins にたいして、尊敬と立腹との両極に大きくゆれ動いた、この Mrs. Bennet とを比較してみると、この二人の女性には、生れ、財産、社会的地位は、

はるかにかけはなれているにもかかわらず、皮肉にも大きな共通点のあることが発見される。

It is a fine ironic touch that when, for a brief moment, fate brings them together, they communicate at first through an interpreter, and that interpreter is Elizabeth.¹⁶

Elizabethこそ、母親と Lady Catherine という二人の俗物女性が、各自の勝手な、御都合主義の意思をつらぬくための、餌食、犠牲者であった。

Darcy が、Wickham と Lydia とのために多額の金を使い、二人を結婚させることによって駈落事件を収束したこと、また彼が、Bingley と Jane との縁組をまとめることに努力したことは、これまで Lady Catherine によって頑固に死守されてきた社会的地位、財産という上流階級の城から、人間性の尊厳、自由、平等を擁護し、幸福に生きようとする世界への Darcy のけんきよな脱出を意味すると同時に、彼と Elizabeth との愛情の花の咲きそめることを意味するであろう。

At the opening of the novel his conversation is almost wholly self-centered. At the close, it verges on humility.¹⁷

これは Darcy の性格が、自己中心から他の人達と共感し、けんきよになっていく変化を示すものである。また Dorothy Van Ghent が、Elizabeth について指摘しているのであるが、

Clearly it is Elizabeth Bennet who provides the "eyes" of our judgment, our norm of intelligent values.¹⁸

Elizabeth にとっては、彼女が世間を観察すればするほど、不満足になり、本当に愛することの出来る人は少く、立派な人と考えることの出来る男性は更に少いのである。Mrs. Bennet は、結婚の有利な条件とか、金銭などしか考えられない母親であり、最も低級で、鈍感で、識別力のない母であった。

We think of Elizabeth as civilized in feeling and mentality,

and of Mrs. Bennet as stupid and vulgar; ...¹⁹

このように、Elizabeth の優秀な人間性の発育、Darcy の人格の高潔さ、二人の愛情の芽生えを、かねてから見抜いていたのが、Mr. Bennet である。したがって、父 Mr. Bennet のよろこび、承認の表現は、結婚するのにまことにふさわしい二人であると、簡単に、理性的で、しかも深く愛情のこもったものである。

‘I have no more to say. If this be the case, he deserves you. I could not have parted with you, my Lizzy, to any one less worthy.’²⁰

それにひきかえ、これまで、Darcy を不愉快な青年であるとののしっていた Mrs. Bennet は、たちまち態度をひょうへんする。この母親のよろこびは、感情的、爆発的で、彼女は ‘rich’, ‘great’, ‘pin-money’, ‘jewels’, ‘carriages’, ‘happy’, ‘charming’, ‘handsome’, ‘tall’ といった言葉を速射する。この母親には、莫大な財産、宝石、紋章つきの馬車などが、気の遠くなるほど貴重なのである。彼女は、社会的地位、財産にあこがれ、娘の貞操をそれとひきかえようとする、かなしい物の奴隷であり、単純、無知なピエロなのである。また Lady Catherine が、Darcy と Elizabeth との接近を妨害し、引きはなそうとしたことが、逆に二人を結びつけることになったのは、人生の転回を予見することがむつかしいとほいうものの、はなはだ、皮肉なことと言わなければならない。

III

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune must be in want of a wife.²¹

Pride and Prejudice の冒頭に示されたこの文章によって、読者は、18世紀末のイギリスの田舎の中流階級の平凡な生活、娘の貞操を財産視した親達の多くの愚行、ナンセンスを描こうとする Jane Austen の人生観

と、彼女の作品のもつ性格とを察知することが出来る。彼女の親戚 James Edward Austen-Leigh が、彼女の思い出の中でふれているのであるが、彼女の作中人物は、彼女の身边的人達をそのまま写したのではなくて、彼女の見聞から得られた知識にもとづいて、それぞれの性質を与え、創造したものである。“... it was her desire to create, not to reproduce; ...”²² このように、彼女の創造力が明かにされている。もともと、彼女は、世間の人達とはかかわりあいを持つことをさけていたし、作家としては無名のままであることを望んでいた。Harrison R. Steeves の見解によると、彼女の知的な手堅さ、そっけないヒューモアが、読者たちを彼女になじませなかったし、またセンチメンタリズムとロマンスとを彼女が軽蔑したために、感傷的な作品を愛読していた当時の読者たちを、彼女からはなれさせ、無関心にさせた²³、ということである。

愚かなことにたいする素早いセンスを持っていたけれども、彼女は、知人を愚弄することがなかったし、村の隣人たちとは友情関係を持っていた。彼等の行動は、彼女をよろこばし、関心を持たせた。彼女はそれを聞くのを好んだ。

Jane Austen too, that exquisite artist, was preeminently social in her interests.²⁴

このように、彼女の関心は、社会的であることが指摘される。こういう彼女の生活環境の中から、彼女の作中人物が醸造されてきた。愚かな Collins を自分の意思でえらび、その選択を無理にも正しいと思いこもうとする Charlotte、金銭をにぎるためなら、たとえ、どんな破廉恥な行動をも辞さない Wickham、若気の至りとは言いながら、うかつにも美しい女性 (Mrs. Bennet) を妻とし、そのうかつさを、それ以来ずっと後悔しつつつけてきた Mr. Bennet、祖先の体面、社会的地位を守って生きてきたために、まさに自己の自由を危うくしようとしかかった Darcy、これらの人達は、仕方なしではあるが、一応は主体的に行動の出来た人達である。

ところが、無力であるが故に、危険な愚行に身をゆだね、しかも、その愚かさに気付かない Mrs. Bennet, Lydia, Jane, Bingley などのような人達は、自ら道徳的判断が出来ない。こういう人達とははずれて、Elizabeth はしっかりと自分で行動の選択が出来る女性である。しかし、細心に観察してみると、Mr. Bennet や Elizabeth の性格は、余りにも完全でありすぎて、魅力に欠ける。したがって、この作品の芸術性を支えている大きな要素は、脇役ではあるが、生き生きとして描写されているこの Mrs. Bennet のような、典型的な母親の創造にあると言えるのではなからうか。

Bingley と Jane との愛、Darcy と Elizabeth との愛、また副プロットとして、Wickham と Lydia との愛は、本質的には同じプロットであると指摘されるが²⁵、こういうプロットにまたがって、それこそ、真剣に娘の縁組に狂奔し、そのために愚行、ナンセンスをくりかえしながら、本人はそれにいささかも気付いていない、単純、無知な母親の典型として、Mrs. Bennet が創造され、その真価を発揮するのである。それ故にこそ、彼女の存在意義、彼女の果たした役割は、一段と光彩をはなち、この作品に生命感を与えるのである。彼女は、当時の結婚適齢期の娘を持った多数の母親たちの代表者であり、典型である。小説の使命は、典型的、代表的、普遍的人物の創造にあり、生きた、個性的な人間の創造にある。もしこの Mrs. Bennet が、この作品に姿を見せなかったならば、この作品の芸術的価値は、おそらく半減され、全く魅力のないものになっていたであろう。Jane Austen は、皮肉な筆致で、女の世界にみとることの出来た真実を描こうとした。「面白うてやがて悲しき鶉飼かな」という芭蕉の句があるが、欲望の海をむなしく泳ぎ、疲れ果てるこの Mrs. Bennet は、いつもおもしろくて、いつもかなしい母の姿である。

注

1 cf. Richard Church, *The Growth of the English Novel* (New York: Methuen & Co. Ltd., 1961), p. 105.

- 2 Raymond Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London: Chatto & Windus, 1971), p. 21.
It is indeed that most difficult world to describe, in English social history: an acquisitive high bourgeois society at the point of its most evident interlocking with an agrarian capitalism that is itself mediated by inherited titles and by the making of family names.
- 3 cf. Yasmine Gooneratne, *Jane Austen* (Cambridge: University Press, 1970), p. 23.
- 4 *Sir Charles Grandison* (1754) Samuel Richardson の男性を主人公とした書翰体小説。絶世の佳人 Harriet Byron が悪党 Pollexfen の毒牙にかかろうとする危機を、文武兼備の立派な紳士 Sir Charles Grandison に救われる。彼女の感謝の念は恋とかわる。しかし、Charles がかつてイタリー滞在中に貴族の娘 Clemmentina と激しい恋におち入ったが、国籍と宗教とのちがいがから結婚を断念し、帰英したことを知り、Harriet は懊悩する。諦めたと思った Clemmentina が彼を慕ってイギリスにやってくるが、説得されて他の男性と結婚する。その結果、Harriet と Charles とが結ばれる。
- 5 *Clarissa Harlowe* (1747-8). Samuel Richardson の女性を主人公にした小説。プロポーズをことわられた悪党 Robert Lovelace は、腕力に訴えても Clarissa の貞操を奪おうと計画する。彼女をあいまい宿に監禁した彼は、彼女に麻酔薬を使い、肉体をうばってしまう。この世に生きる望みを失った彼女は自殺する。
- 6 A. Walton Litz, *Jane Austen: A Study of her Artistic Development* (New York: Oxford Univ. Press, 1965), p. 24.
- 7 cf. A. Walton Litz, *op. cit.*, p. 20.
- 8 cf. Vineta Colby, *Yesterday's Women: Domestic Realism in the English Novel* (Princeton University Press, 1974), pp. 117-8.
- 9 Jane Austen, *Pride and Prejudice* (London: Everyman's Library, 1968), p. 1.
- 10 David Daiches, *A Study of Literature for Readers and Critics* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1964), p. 113.
- 11 Vineta Colby, *op. cit.*, p. 74.
- 12 Jane Austen, *op. cit.*, pp. 25-6.
- 13 *Ibid.*, pp. 90-1.
- 14 Yasmine Gooneratne, *op. cit.*, p. 88.
- 15 Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery* (New Jersey: Princeton Univ. Press, 1952), p. 96.

- 16 Yasmine Gooneratne, *op. cit.*, p. 99.
- 17 Harrison R. Steeves, *Before Jane Austen: The Shaping of the English Novel in the Eighteenth Century* (New York: Holt, Rinehart and Winston), p. 346.
- 18 Dorothy Van Ghent, *The English Novel: Form and Function* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1953), p. 346.
- 19 *Ibid.*, p. 348.
- 20 Jane Austen, *op. cit.*, p. 317.
- 21 *Ibid.*, p. 1.
- 22 James Edward Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen* (Oxford: The Clarendon Press, 1963), p. 157.
- 23 cf. Harrison R. Steeves, *op. cit.*, p. 333.
- 24 Margaret Schlauch, *Antecedents of the English Novel 1400-1600* (London: Oxford Univ. Press, 1963), p. 3.
- 25 Robie Macauley and George Lanning, *Technique in Fiction* (New York: Harper & Row Publishers, 1964), p. 175.